

米、死刑公開を徹底

記者も立ち会い

米国で死刑論議が高まっている。昨年、死刑囚が執行の際に苦しみながら死亡したことがきっかけだが、記者を含め公開を徹底しているからこそ実態が分かった。外国人記者の取材を認める州もある。300件以上の執行に立ち会った地元記者は「使い古された言葉だが権力監視の一環だと思ふ」と強調した。

在り方に関心高まる

「死刑囚の執行手続きは裁判所の決定で一時的に停止されました」

▼3時間前

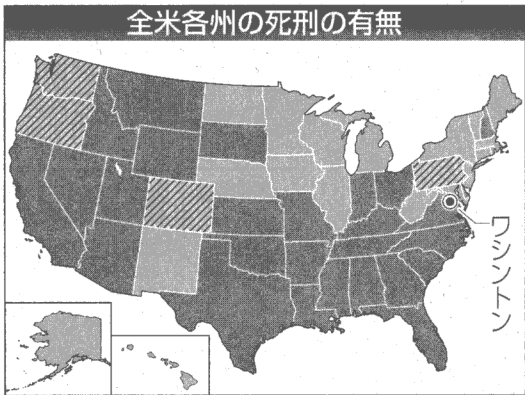
9月中旬。南部オクラホマ州マッカレストラの拘置所で、州幹部

が午後3時に予定していた死刑執行の停止を告げた。集まった記者約50人の緊張が一気に解けた。

リチャード・グロシブ死刑囚(52)は1997年、勤めていたモーターのオーナーを同僚に野球のバットで撲殺させたとして殺人罪で死刑判決を受けた。だが、起訴事実を認めて終身刑になったこの同僚の証言が検察側の証拠の柱。物的証拠はなく、グロシブ死刑囚は無罪を主張している。

弁護士が同僚の証言の信用性を疑わせる新証拠を提出し、執行の3時間前に一時停止が決まった。記者団に囲まれた弁護士は「本人は拳を突き上げ喜んで

米オクラホマ州マッカレスタの拘置所奥の前で、グロシブ死刑囚の刑執行停止について記者団の取材を受ける弁護士ら(右手前)



※「死刑情報センター」による。2015年7月1日時点

いた」と笑顔で語った。執行は2週間停止され、その後、11月まで延期された。

オクラホマ州では昨年4月、米国で一般的な薬物注射で死刑を執行した際、手足を拘束された死刑囚が激しく体を動かした。うめくような声も聞こえた。薬物の調査が不適切だったため苦しみだとみられる。立ち会った記者が詳細に報じ、死刑の在り方に関心が高まった。

薬物の調査の問題には、死刑廃止論の高まりから製薬会社が販売を渋り、信頼性の乏しい薬物に頼っているとこの事情がある。グロシブ死刑囚は人権無視だと訴えたが、連邦最高裁は6月、裁判官9人のうち5対4の僅差で合憲判断を示した。

▼透明性

米国ではいとし7月(マッカレスタ共同)

時点で31州が死刑制度を認め、死刑囚の親族らのほか報道陣に公開している州も多い。

オクラホマ州の場合、記者用は5席。各メディアの記事を配信するAP通信に1席、事件が起きた地元メディアに1席を優先的に与える。残り3席。「今回は異例の希望者数(州当局)で倍率の高い抽選になるはずだったが、その前に停止が決まった。

いかなる気持ちで死刑執行に立ち会おうのか。AP通信ヒューストン支局のグラフィック記者(65)は、1984年からテキサス州の死刑に立ち会ってきた。これまで300〜400件の執行を取材したことで知られる。

グラフィック記者は死刑の是非については慎重に言及を避けた。ただ「政府の透明性を大切だと考えるなら、執行の公開は極めて重要だと思ふ」と語った。